佐佐木信綱記念館だより

第三十三号

平成三十年度　佐佐木信綱記念館特別展報告

目次

・平成三十年度特別展報告
・小展示報告
・寄贈資料紹介
・信綱一首
・学芸員の気まぐれコラム

歌人たちの歌集

『心の花』記念号

■展示の概要

平成三十年度佐佐木信綱記念館特別展「信綱と『心の花』の歌人たち」が、平成三十年十一月七日（水）から十二月十六日（日）まで開催されました。信綱とその門下たちが、明治三十一年（一八九八）に雑誌『心の花』（当時は『こゝろの華』と表記）を創刊して、百二十年となることを記念しての企画でした。

『心の花』は、先行世代を「旧派」として批判し、和歌を新たな文学表現として革新しようとする「新派」歌人たちによる運動の中で創刊されました。当初は様々な派閥が寄稿する総合雑誌の役割を担い、運動が沈静化した後は、信綱が主宰する結社・竹柏会の機関紙となっていきました。その後も信綱が掲げた「ひろく、深く、おのがじしに」を理念とし、歌人の個性を尊重する姿勢を現在まで一貫して続けています。

展示の構成は、『心の花』が創刊されるまでの経緯を説明した後、『心の花』の歌人たち十四人を、信綱が生きた明治・大正・昭和の時代に分けて紹介しました。

主な展示資料は、『心の花』の歌人それぞれの歌集や短冊、歌人たちによる合同歌集を中心に展示しました。信綱を除く歌人たちの初期作品は、明治期に出版された合同歌集へ収録され、個人の歌集は、大正期に「心の花叢書」として出版されていきました。

竹柏会合同歌集『あけぼの』
修文館　明治39年（1906）

片山広子『翡翠』
竹柏会　大正5年（1916）

特別展期間中には六百九十名の方にお越しいただきました。ご協力いただきました皆様、誠にありがとうございました。

■講演会の様子

特別展期間中の十一月十日（土）には、記念館二階ホールにて、講演会を開催しました。佐佐木信綱顕彰会主催「信綱祭」の一環であり、毎年、講師による講演と、文化財課学芸員による展示解説を行います。

今年度は、佐佐木信綱顕彰会理事を務める川北富夫氏が登壇され、「佐佐木信綱先生のことども」と題して講演されました。信綱の生涯や、「道」という言葉に込められた信綱の思いを、ご自身の思いも交えて熱弁されました。

■特別展図録冊子

今回、展示した資料の図版と解説を掲載した図録を、無料で配布しています。

在庫は残り少なくなっておりますので（平成三十一年三月五日時点）、お求めの方は佐佐木信綱記念館へ、お早めにお越しください。

学芸員の気まぐれコラム

『心の花』を創刊し、和歌の革新に乗り出した信綱は、他方で幼少から古典に関する教育を父・弘綱から受け、旧派と呼ばれた歌人たちとも積極的に交流するなど、和歌の伝統を強く継承していた人物の一人でした。この「伝統」と「革新」の二つの側面は、信綱の持つ魅力の一つでしょう。

『心の花』の理念である「ひろく、深く、おのがじしに」について、信綱は自伝『ある歌老人の思い出』で、明治期に輸入された西欧の自由思想に加え、弘綱から教わった「國學」的な考へ方」の影響を述べています。国学とは、江戸中期に成立した、古事記や万葉集などの古典を文献学的に研究し、儒教や仏教が伝来する以前の日本文化を明らかにしようとした学問をいいます。契沖の万葉集研究に始まり、荷田春満、賀茂真淵を経て、本居宣長によって大成され、平田篤胤らに引き継がれました。

信綱は国学をどのように捉えていたのでしょうか。信綱が江戸期の和歌史について解説した『近世和歌史』の冒頭では、江戸期における和歌史を六つの段階に分けて説明しています。第一に中世以来の二条家を中心とした歌風が破壊された元禄期、第二に復古の機運から賀茂真淵やその門下が登場した時期、第三に荷田在満や本居宣長が新古今和歌集の歌風を推奨した時期、第四に真淵の門下であった加藤千蔭や村田春海らが江戸派を形成した時期、第五に江戸派の擬古的な歌風への反動として小澤蘆庵や香川景樹らが勢力を持った時期、第六は幕末の歌人が活躍した時期としました。信綱は、国学を江戸期の歌壇の主流として捉えていたとわかります。

また、信綱は、江戸期の和歌史を「古歌風の眞精神復興のうちに眞の自分の歌というものを詠み出してゆかうといふ運動の流」と位置づけ、当時の歌人たちにとって、「古歌に帰るといふ事と、自分の歌を詠まうといふ要求との二つは、多くの場合に於いて調和されてゐた」と述べています。「おのがじしに」の理念及び個人の表現を追及した近代短歌は、一貫して和歌の伝統を継承するものと意識されていたといえます。

参考文献
・『ある歌老人の思い出』（朝日新聞社、一九五三）
・『近世和歌史』（博文館、一九二三）

ご利用案内

三重県鈴鹿市石薬師町に拠点を構える佐佐木信綱記念館は、明治・大正・昭和の時代を生きた歌人・国文学者である佐佐木信綱（明治5～昭和38）の遺功を称えるべく、昭和45年に鈴鹿市が設置した展示施設です。もとは「信綱生家」を拠点として開館しましたが、昭和61年に「信綱資料館」が併設されて以降は、こちらを中心に展示活動が行われてきました。資料館と生家の隣には、佐々木家がかつて書庫として使用した「土蔵」や、信綱が還暦を自祝して寄贈した「石薬師文庫閲覧所」なども残されており、これらを一体として佐佐木信綱記念館と称しています。

かつての愛用品や、少年期の短冊、ペンネームの由来である名刺、唱歌「夏は来ぬ」の歌詞がしたためられた色紙など、数々の収蔵品を常時展示するほか、毎年秋頃には特別展も開催し、市内外への魅力発信に努めています。

佐佐木信綱記念館

鈴鹿市石薬師町1707-3　TEL&FAX 059-374-3140
開館時間　9:00～16:30
休 館 日　毎週月曜、第3火曜（休日の場合は開館、翌日休館）
　　年末年始
アクセス　近鉄鈴鹿市駅からC-バス乗車
　　佐佐木信綱記念館下車徒歩2分
　　東名阪自動車道
　　鈴鹿ICから車で約20分

資料館

発　行
鈴鹿市文化スポーツ部　文化財課（鈴鹿市神戸一丁目18-18）
TEL 059-382-9031　FAX 059-382-9071
HP 鈴鹿市文化財ガイド http://suzuka-bunka.jp/

小展示報告

展示室中央にある覗きケースと入り口左手の展示スペースを使用して小展示を行いました。

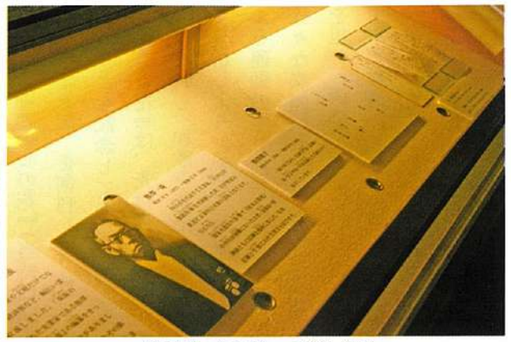
■「熊澤一衛・照子との交流」

七月十八日(水)から十一月四日(日)まで、展示室中央覗ぎケースにて、四日市出身の実業家である熊澤一衛とその娘・照子が、信綱と交わした書簡を展示しました。

一衛は、旧四日市製紙取締役を経験した後、旧伊勢電気鉄道兼四日市銀行頭取を務めた人物で、優れた経営手腕から「東海の飛将軍」と称されました。数ある万葉集伝本の相違を一覧できる『校本万葉集』の刊行が、関東大震災の影響で困難に陥った際には、信綱と面識のあった政治家・田中光顕の紹介を通じて、金銭面・精神面から信綱を援助しました。その後も生涯にわたる親交を結び、一衛は「月台」と号して、照子とともに信綱から短歌を学びました。

信綱は書簡で、湯の山にある一衛の別荘を訪ねる予定を知らせたり、照子の歌や文章を添削したりしています。また、照子の結婚を祝って信綱の妻・雪子が一衛の父・市兵衛へ宛てた手紙や、一衛の死を悼み信綱の弟・印東昌綱から照子へ宛てたものもあり、家族ぐるみの親密な関係が窺えます。

一衛と照子の歌集『月台集』(左)、照子の原稿(右)


一衛肖像(手前)、書簡(奥)

■大伴家持生誕千三百周年記念　特別陳列「信綱と大伴家持」

十月六日(土)から二十一日(日)まで、大伴家持生誕千三百周年を記念し、入り口左手の展示スペースにて、富山・石川・鳥取三県にある大伴家持と信綱の歌碑の写真を並べて展示しました。同時期に鈴鹿市考古博物館にて開催された特別陳列「大伴家持が見た伊勢国府」、十月八日(月)に亀山市歴史博物館学芸員である中川由莉氏を講師に招いた特別講座「大伴家持と伊勢国―歌人そして国守として―」と連動した企画でした。

万葉歌人として知られる家持は、奈良時代の官人でもあり、越中守や因幡守(現在、越中国は富山県と石川県の一部、因幡国は鳥取県)として赴任した際には、任地で歌を作りました。信綱はそうした家持の歌を踏まえて短歌を詠んでおり、現地には二人の歌碑が残されています。富山県では射水市の放生津八幡宮に家持の歌碑、同市の放生津小学校前庭に信綱の歌碑があり、石川県では七尾市ののとじま臨海公園水族館に家持の歌碑、同市の弁天崎公園に信綱の歌碑、鳥取県では鳥取市の因幡万葉歴史館に二人の歌碑が並べて建てられています。

・富山県歌碑

東風いたく吹くらし奈古の海人の釣する小舟漕ぎ隠る見ゆ(家持)

立山の遠きいただきの雪ひかり千鳥舞ひまふ奈古の古江に(信綱)

・石川県歌碑

鳥総立て船木伐るといふ能登の島山今日見れば木立繁しも幾代神びそ(家持)

うた人の国守巡り見し日にも山きよらに海しつかなりけむ(信綱)

・鳥取県歌碑

新しき年の始の初春の今日降る雪のいや重け吉事(家持)

ふる雪のいやしけ吉事ここにして歌いあげけむ言ほぎの歌(信綱)

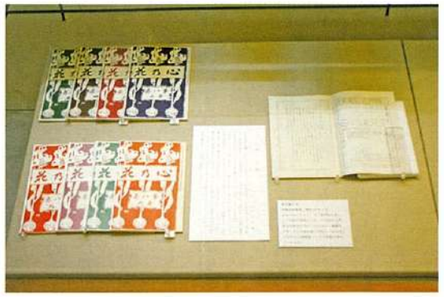
富山県にある信綱歌碑
(写真:佐佐木信綱顕彰会蔵)

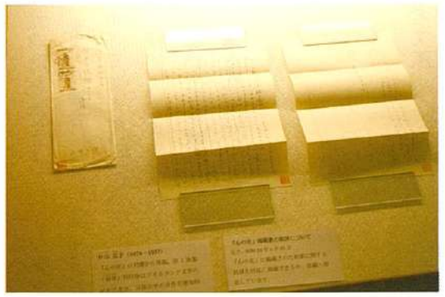
■「信綱と『心の花』の歌人たち　書簡編」/「創刊当初の『心の花』」

十二月十九日(水)から、展示室中央覗きケースにて信綱と『心の花』の歌人たちが交わした書簡を展示しました。特別展でも紹介した大塚楠緒子、石榑千亦、川田順、木下利玄、九条武子、片山広子、五島茂らと信綱の交流の様子をみることで、特別展とはまた違った歌人たちの一面を紹介しました。

入り口左手の展示スペースでは、明治期の『心の花』の復刻版を展示しました。『心の花』第一巻では、旧派の歌人たちが数多く目次に名を連ね、江戸期の歌人の色紙を附録するなど、和歌の伝統を尊重する姿勢が強く見られます。第二巻から八巻までは、正岡子規の弟子たちであった鶯蛙吟社の歌人が編集委員を務めるなど、総合雑誌としての性格を持っていました。展示では、第一巻をはじめ、鶯蛙吟社発行の『詞林』との合同を発表した第二巻一号、竹柏会出版部を立ち上げ竹柏会の機関紙として再出発した第八巻一号を取り上げました。

今後も、様々な視点から信綱を紹介していきます。ぜひ、ご覧ください。


『心の花』第8巻1号から9号の復刻版

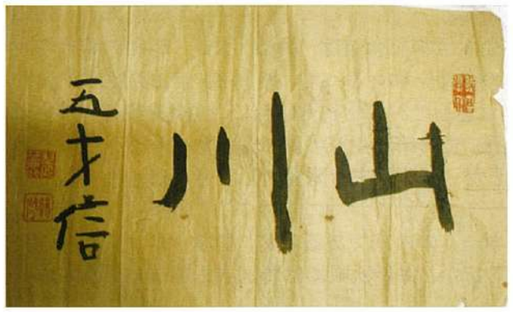

昭和24年、片山広子から信綱宛書簡の写真

寄贈資料紹介

今年度もご厚意により二点のご寄贈を賜りました。

■信綱墨書「山川」/三重県個人寄贈

かつて佐々木家と交友のあった個人の方からご寄贈いただきました。「五才信」とあり、右上の冠帽印は「□雲□泉」、左下の白文印は「翠麓」、朱文印は「餘戯」と捺印されています。幼い信綱が訪問した際に書いたものと思われます。



■信綱書簡/三重県個人寄贈

三重県在住の個人の方からご寄贈いただきました。信綱が純正詩社編集部に宛てた葉書です。純正詩社とは、歌人・西出朝風らによって設立された結社であり、口語を用いた短歌や俳句の普及に尽力しました。

消印の日付は十二年四月二十九日とあり、西出らが活躍した大正期のものと思われます。信綱は、「北原さん」の「曠野」を面白く読んだと述べ、「くわうやとかながふってありますが、訓で読んだ方が口語に相応しくはあります」と指摘しています。

信綱一首 33

願はくはわれ春風に身をなして
憂ある人の門を訪はばや

明治三十二年(一八九九)四月に開かれた竹柏会第一大会にて、兼題(歌会が始まる前から設定されていた題)の「春風」について詠まれたものです。佐佐木信綱記念館の玄関と、信綱が晩年を過ごした別荘・凌寒荘の垣根に歌碑が設置されています。